

第18期  
読者モニター  
アンケート  
企画

## —第5回— 「おぢば帰り」

### 幼少期のたった1度が種蒔きに

大塚 徹さん

66歳・櫻地分教会ようぼく・奈良県香芝市

幼少のころ、家族で初めておぢば帰りをした。しかし、その後は40歳を過ぎるまで一度も帰ることはなかった。

2度目の帰参のきっかけは妻の身上だった。母からおぢば帰りを勧められたのだ。

当時は、おつとめの手が振れず、参拝してしばらくは殿内で端座していた。そんななか、参拝者が唱える「みかぐらうた」の歌声だけが聞こえる神聖な雰囲気にもまれ、自然と心が澄んでい

き、親神様の存在を強く感じた。

後日、母から別席を運ぶよう勧められた。以前なら承諾しなかっただろうが、あの体験のおかげで素直に運ばせてもらい、ようぼくの仲間入りを果たした。

幼少期のたった1度のおぢば帰りで蒔かれた種が、三十数年後に芽を出したのだと思うと、おぢばの不思議な力を感じずにはいられない。

### 周囲の人に声かけを続けるなか

高畑育代さん

58歳・江住分教会白浜布教所教人・和歌山県白浜町

幼いころから病気がちだった息子を連れて、月に何度か天理よろづ相談所病院へ通っていた時期がありました。

あるとき、布教所長さんから「せっかくおぢばに帰るのだから、通院だけを目的にしてはいけません。教祖が喜んでくださることをしては」と助言を受けました。以来、病院へ行くときは親戚やご近所に声をかけました。嫌な顔をされても、お土産を渡すことを心が

けました。

そうするうちに、義母がようぼくの仲間入りを果たし、息子は天理高校第2部へ進学してくれました。息子の病気は完治していませんが、現在、会社員として元気に過ごし、毎月のおぢば帰りを続けています。

布教所長さんのひと言が、いまの結構な姿につながっていることに、感謝の思いでいっぱいです。